

は先づ今日の兒童に良横範を示して幼時より第一に良習慣を付けなければならぬと思ふ。之れが爲めには學校は勿論有力なれど、前述の如く學校に於てのみ訓練しやうと思つても家庭が其の氣にならなければ結局駄目である。畢竟幼時の教育乃ち根本教育の改良は家庭と學校との兩方に存するものである。

吾輩の言を待たず、教育は既に母の胎内に始まつて、出生後之れを怠らず、智育は別として體力と品性とは小學校卒業の頃までに完成すべきものである。中學又は高等女學校に入學後之れを改めるが如きは、爾來の經驗によれば殆んど不可能である。自分は中學生も高等女學校生徒も監理した事が在つて種々改良に就つて骨を折つて見たが、悪しき家庭に於て養成せられ且不完全極まる小學校を卒業したる子弟の十中八九迄は其の改善の見込がないのである。夫故吾輩は愛國婦人會の隣地に精華學校を設立して、幼稚園から生徒を入學せしめ、今日では小學六年生迄の設がある、と云ふ事にした。精華學校には悪い家庭の兒童は一切入學

せしめない入學を申込んで来た時には先づ其の家庭が果して好きか悪きか、殊に母は如何なる人であるかと云ふ、先づ母の人となりを充分に取調べて、然る後始めて其の子女に入學を許すの方針を執つて居る。悪しき家庭の兒童であれば、入學せしめていくら骨を折つても自分の理想的の教育が出来ないからである。

そこで、愛國婦人會の如き有力なる婦人團體に於ては、亦此の家庭の改善と云ふことに充分に努力して貰ひたいものと思ふ。果して家庭が十分に改良せられたならば、學校教育も従つて其功を奏し、遂には社會の改善も出來得るであらうと自分は堅く信じて居るのである。

保育叢話

光藤夫人

○母親の子女に對する態度

父嚴に、母慈といふ諺は、古來より親の子女に對するすべての態度を言ひあらはしたものであら

うと思ひます。

之れが父親たる人も、常に家庭にあり母親も亦家庭にありて、両親打揃ふて子供を教養する場合でありますならば、丁度寛嚴程よく調和して、其の子の爲によかるべく思はれますが、世の實際はそうではありません、男子は少くとも晝間は外出して奮闘し、夜に入りて始めて家庭の人となるのが多いのでありまして、幼兒が活動盛りの晝間は大抵は慈母の手一つで養育されるのでありますから、家庭教育の實際は大抵母の責任と見てよろしからうと思はれます、家庭教育の主任者、即ち母親が慈心に富んで其の子を愛撫する事のいかに人にすぐれて居まして、剛毅の徳より出まする嚴重なる所がありませなんだならば、其の子はどうなるで御座いませうか、父親の嚴格なるには、恐れて服しましたも、其の人は大抵自分の目の黒い中は留守勝である、こゝに於てか、我儘に陥り易い恰憫な子は、慈母の恩愛に馴れてやがては之を侮蔑しはじめます、天真爛漫なる子供は已に内心母を侮る様になりましては、不孝になるからか、

る念が起つても之を行に表さないといふ事は無論出来ません、侮蔑の舉動を母に仕向けますと、母親は快感は起りませぬ、起りませぬけれども、今迄やさしかりし己が仕打を俄かに變へるといふことは出来ないうし、一つは又溺愛の餘りマー生意氣になつた地位に考へて、大目に見て居りますと、だんたん智恵づく事の盛りな子供は、次第にそれが嵩じて来て、侮蔑される毎に小言位いふて叱つたとて、子供は已に其の侮蔑の念を遠き以前に發する事とて、容易に母親に服しません、遂に母親は與し易いと考へまして、之を畏れるといふ事を知ません、其目を偷みてはよからぬ行をする様になります、つひには度し難い人間となり下る事もあります。ダカラ無論父親は外事に奮闘する身分ではあります、家庭教育の幾分は分擔して、常に母親の短所を補ひ、且つ之を指導する事が肝要なのであります。又良人をして、内顧の憂あらしめず、全力を外務に盡さしめて、其の成功を祈らるゝ賢夫人ならばよく、自らの短所を覺知して之を補ふべく修養し、慈母であると同時に嚴然動

かす事の出來ない不動の精神を修養して、若し萬一愛兒に過失があるとか、又は罪惡を犯すといふ様な場合があつたならば、よく其の事件を追窮して、其の心的作用を察し、若し心が正直でなくつて起つた事とか、いふ様な場合には、幼兒であるからとて、少年であるからとて、大目に見ないで、充分之を嚴責し、甚しいのは體罰を加へても、其の曲りかけし心を正道に引き直し、再びかゝるいまはしき罪惡過失を犯さしめぬ様に理を盡して之を戒諭し、出來得る限りの力を盡して、其の道を説き示し、其の過失罪惡に對して、恐れ且つ嫌惡の念を生ぜしめ、心から悔悟させる事が肝要ではありますまいか。

稲妻強盜でも、高橋お傳でも、生れ落ちました其の時の心に、かゝる大罪惡を犯さしめると、誰れが思ひ及びませう、生れ落ちし其の時の清淨無垢なる心はやがて、年月と共に四周の境遇により變りまして、心に大なるしみを作るのではありますまいか。其の心にしみの出來ます、即ち心の曲り始める其の動機は只機微の間にある事であらうと

思ひます、幼時母の目を掠めて、一錢の金を取り出した罪惡が、後年の大盜賊となりました話は、よく人の言ふ所で御座います、ア、其の一錢の金を盗み出すの時、母親が嚴重に監視して、よく其の不心得を諭しましたならば、彼れは多分善良の民となつたで御座いませう。一時の母の油斷一時の母の怠慢がかゝる悪い結果を來すのを思へば、世に母親たる人は、自ら戒めてよく我が愛兒の教養を怠つてはなりません、殊に平素嚴なる父親の留守を預り、子供教育の全權を握れる母親は餘りにキビくしく、一から十まで子供を叱る必要はありませんが、否寧ろ何事も大綱を握りて、餘り萬事に關涉はしないで、しかも何事も、細密に熟知して、若し將來にわたりて災害を醸す様な惡事をしましたならば、充分に責罰して、其の災の根を絶つ事につとめなければなりません、ガララ母親はどうしても優にやさしい其の奥に剛徳を備へて、子供の男女に限らず之れが人格の摸形でなければならぬのであります。

かつて學校の事にたづさはりまして、子供の事や、

家庭の様子を、よく調べました事が御座いますか
 私の實際によりますと、どうも父親のない子は、
 どこか缺點がある様で御座います。時には一組四
 十人計りの十五六歳の女兒の中父親なし兒が、五
 人程ありましたのが御座いました。家庭は實業家
 の巢窟といはれる、日本橋の中央で、數十萬の財
 産を擁し、多くの雇人を使用するのが三人ばかり
 ありましたが、寡婦となりし母親は、人に知られ
 し家丈に男勝りの點もあつたので御座いますけれ
 ど、妙に神經過敏の風がありまして、其の二人の
 娘が母親をつくりで、何となく、多勢の中へ出て
 ても圓滿な性情の缺ける所が見えまして、チヨイ
 チヨイ非難も御座りましたが、之等はまだよろしい
 方で、家庭が中以下になりますと何れもコソコソ
 と品性が賤劣でしかもネヂクレタ點が多う御座い
 ました。
 又男兒になりましたは、女親のみの子は、大抵成
 績もよろしくないとか聞いた事もありました。或
 は、甚しいのは前申述べました母親を、侮蔑す
 るの念が長じまして、我儘放埒に身を持崩し、前

途有望の少年が已に、大人さへ寒心する様な罪惡
 を犯して、杖柱とたのみ、一步は一步と老境に近
 づく、母親を、泣かせるといふ様なものもあるとか
 聞きました。
 女子にしても、男子にしても、何れ片親となれる
 子は、不幸に違ありませんが、若し此の時残りし
 母親が、平素からよく其の身を持ち、子供を育て
 るについて、よく研究の態度を取りまして、兒に
 對し、寛嚴宜しきに叶ひましたならばよし、片親
 の不幸兒でも、有爲の男子女子となつて、國家に
 貢獻する事が出来るであらうと思ひますが、残り
 し親が、いづれにしても、心を此處に用ひず我子
 を教化するに、其の宜しきを得ませんと、自らは
 勤勉勞苦して數萬の家産を作りましても、或は一
 世の名望を双肩に擔ひましても、其の子の代にな
 りましては、全く見る影もなく、淋れて仕舞ふ事
 があります。つい片親の時の事に偏しましたが、
 兩親揃ふて居りましても、矢張母親が、中堅とな
 りまして、愛兒を教養し、有爲の人となすの、責
 任があります以上は、母親は必ず慈母と仰がれる

其の中に、威風凜凜何人も犯す事の出来ない、剛徳を備へて、其の子が、男子でありましても、生意氣盛りになりましても、一點侮る事の出来ない母様よと、心から服し、心から仰ぐと云ふ心を湧出させる丈の徳を研ぐ心得が大切で、常に其の兒に對して、端正なる容貌と、嚴然たる心の存する態度を以て、愛兒に接する事が肝要かと存じます

○子供の恐怖心に對する用意

子供の泣くのを止めさせん爲とか、或は悪戯を止めさせんとつとむるの時、よくそれお巡査さんが来たとか、それワンワンが来たとか。それライオンが来たとか。それお化が出たとか。いろんな事をいふて、よく子供を恐れしめる風があります。之は余程注意すべき事柄であると存じます。私は私自己がよく幼少の折柄、蛇の恐ろしいものである事を聞かされまして、何となくいやな恐ろしいものと思ふ間はまだしも、つひには其れが嵩じては、何の理由もないのに、只モーいやに恐ろしいものとの考が、深く／＼染みこみまして、若

し蛇に出逢ひますと其れは大變、胸はハット動悸を打ち、頭はフラフラとする様になりまして、實に其の不愉快な事は、一日も二日も念頭をさりません。この強い神経を激動させました結果は、二度と其の場所に足を踏み入れる事が出来ないのであります。自ら戒めてなるべく恐れまじとつとめまして、幼児よりの深い印象は中々癒りませんので、今に至つても、矢張不圖蛇に出逢ひますか最後、眼の色も顔の色も變りて恐ろしくドキ／＼

とするのであります。何物を以て子供をおどかすのも、よくはありますまいが、殊にありもしない、お化けとか、幽霊とか、滅多に居もしないライオンを以て之をおどかすのは最も慎むべき事と存じます。虚言せし子供を嚴責しながら、親自らが虚をいふて平氣で居る如きは、矛盾の甚しいものではありますまいか、大泣きして止を得ざるの場合でも百方心を變へさせる事につとめて、必ずおどかす事をしない様にしなければなりません、それでも泣き止まず、手段のつきました時は、實際ある動物でも何でも以

てするより外仕方はありますまい、ありもしないものを口にして、子供の泣きを止める如きは、實に其の當を得たものではありませんまい。

よく只一人の幼女を入湯させられるのに、泣き嫌ひて入湯を厭ひますのを、下女は湯殿の口からお嬢様そらお化けがニユツト出ますよ、とノコンと首を出し、お母様は奥の方からそれお灸だよ、早くマツチを持ってお出でと、湯殿をのぞかれ、お父様はなぐりつけるぞと叱られる、母様は湯殿で持余して居られるのを毎夜の様に目撃しました事が御座いましたが、おどかしの習慣がつかますと、却てモ一子供はさかなくなるので御座いますか、

いかいなもので御座いませう。その心理状態がどうなるので御座いますか、よく知りませんが、子供の恐怖心が非常に高まるのは、生後滿二ケ年頃ではありますまいか、私は五人の子供の経過を見まして、大抵五兒が皆其の時機であつた様に思ひます。長男が滿二歳の夏湘南の海に避暑しまして、神社佛閣に参詣しました時、犬を恐れライオンなどを恐れるの念強く、甚しい時

は石のライオンを見て近寄りませんでした。

又長女も丁度其の頃から、暗夜を恐れる風が大變強う御座います、其の子も大抵同じかと存じ

ますが、末子は母の手に育てられて、余りおどかさなかつた故か、暗夜も犬も余り恐れなないと申し

て居りました所が、矢張先日からの動機に因りますか、矢鱈犬を恐れ、暗夜に向つては兩手で顔を

を掩ふといふ風になりました、尤も此の兒が臺所に出まして何か下女の妨げをした時、下女は少々な聲で此の幼兒に囁きました様子でしたが、さて

何かと思ひますと、幼兒はけたましい聲で泣き出しました。下女はモ一何も居ませんよ、皆いつて

仕舞ひましたと言ふてすかして居りましたが、多分お化か犬か出張したとおどかしたものと想像

しましたが、之れがまさか原因となつたのでは

ありませんまいか、マ一こんな事が積りますと屹度其の兒に、抜く事の出来ない恐怖心が高まるので

はありますまいか。何分此の時分は極大切な時機である様に思はれますから、どうか此のおどかしといふ事を避けて、

子供を泣かさじとつとめたいと思ひます。

○下婢を雇入れる時の注意

上流の家庭に奉公して、行儀作法を見習ふとかいふ目的のものには、づいぶん教育もあり、良家に育ちました、女らしき女も御座いますが、其れでも其の家庭に雇入れまして、自家の一員としますには、よく吟味して家の不爲とならない様に心掛けなければなりません、中流下流になりますと、又一層人撰に注意しないと困るものであります。なせならば、或は貧窮の爲めに奉公するとか、逆境に身を陥れて、安心して居るべき場所がないから、奉公に出るとか、或は田舎の百姓の娘が嫁入前見習として奉公に出るとか、家庭の不和上止むなく奉公に出るとか、其の情實の種類は澤山ありませうが、之等はマア先づ無教育の女が多いのであります、其の無教育な女を使用して、一家の仕事を手傳はせるのは、之は主婦の最も六ヶしい仕事であると思ひます。

殊にこの東京あたりで諸々方々を渡りあるきした

スレッツカラシと來たらば、其れは殆んど人間の業でないといふ様な下劣な事を常に平氣でやるのがあります。

いづれにしても、この無教育な野育ちの女を使ふ事でありますから、ツレは氣に入らぬ事の日々に幾度あるか分りませんが、そこは主婦の氣をつけなければならぬ點でありまして、其の都度小言を以て之を直さうといたしますれば必ず失敗に終るのであります。其處に深い深い同情の念を以て、彼等の無教育なりし不遇をあはれみ、決して小言で直さうとしないで、之を教導し指導するの面倒を見てやらなければならぬのであります、一寸の虫にも五分の魂とか、之等殆んど禽獸に近い無智文盲の女でも、主婦の眞に彼等の前途を憂ひて、面倒を厭はず、見てやりましたならば必ず主婦の恩恵を感じして、少くも家の不爲となる様な事は余り爲ないであらうと思ひます、されど困りますのは之等無智の人間は余り常に同情深くあはれみの念を以て導きますれば、其の恩徳を知りて、之に狎れますが、主婦の恐るべき事を知らさ

なければ、此等無智者は統治する事が出来ませんなせならば彼等は今迄奉公に出るまで、不取締なる家庭にありて、親が彼等の不都合を責めます時は、決してやさしき言葉、やさしき舉動をあらはしたものではありません、甚しいのはコノ野郎このアマと大きなゲンコをふり舞される事もあるのです、彼等の親を恐れるのは、大抵此の暴舉即ち腕力を恐れるのであります。その女が急に奉公して、良家庭に入りまして、主人のお小言はマー皆無といふてよろしい、只やさしき主婦の訓言を耳にするのみとなりましては、彼等は主婦の心事を察する事は無論不可能の事で、只やさしい奥様、大抵な事は叱られないから大丈夫、とてもブタレナグラル様様の事はあり相もない、気がラク／＼としたといふ風で、すべて不都合のありました事を二度も三度もくり返して平氣な様もあるのがあります、又命せられた事でも、等閑にしておく様な事もあります、そこで主婦はこの同情の念と共に威を示す事を忘れてはなりません、或時は嚴然と其の不都合を叱責して、彼女をして恐れし

める様な場合も大切であると存じます。而し此の手段は余り數多く用ひてはなりません、無教育なる彼等は必ず心中主婦を恨み、たちのわるい様な女は家を仇にする様な事がないとも限りません。一體家人に關係の多いこの下婢を雇ひ、之を用ひます、心得はずおん大切な事で種々著述も御座いますから、こゝには余り深くはのべませんで、只子供本位の家庭の雇人のみにつき述べたいのであります。

雇人には種々ありまして、或は勝氣なもので、仕事のよくはかがゆくものがあります。或は極温和で一向仕事のはかの行かないのがあります。これはどうも一利一害で、ハキ／＼と仕事のハカドルものは家の仕事の上から見ますれば、大層よろしいので氣持のよいものであります、後者は中々ハカがユカないでダラシない様な風で御座います。私がかつて片田舎で良家庭といはれる百姓の娘の姉妹を使つた事が御座います、一體私の家は子供多く、その上、外様のお子も數人お世話いたして居りますから、仕事もずるぶん多い方で御座います

から常に之に酬いてやるとの心配の絶えた事はありませんが、この少からぬ務を全うしますには、何うしても時間を制限する必要があると思いますので、下婢には、一定の時間を一定の仕事を大要定めておきまして、所謂分業制度であります、しかし此の分業制度は、余程主婦が注意しませんが主婦の暇のない所は、カピ生ずで、どうしても主婦が全體の務を念頭におきて常に之を監督する事を忘れてはなりません。

マース様にいたしましたして、下婢は大抵夜の八時から就寝まで、習字と讀書を教へて居りますが、姉の方は極温和な性質で、よく子供のすべてを可愛がりました、彼の下女は天性子供好の様でドンナ用事も打ちやつて、子供の世話をするといふ風で暇な時には、一人は背に負ひ、三人も手を引いて野外に遊ぶのを無上の樂として居りました。ダカラ何の兒も皆彼を慕ひまして、朝目を醒ますと、彼の女の名を呼んで居りました。下女にあり易い、主人よりお小言でも頂くと、其の不平はすぐはたに居る無邪氣な子供に移り易い

のですが、彼は一向さる事がありませんでした、かゝる場合にはむしろ子供を相手にして、其の無邪氣なる子供によりて、其の不平を忘れるといふ風で御座いました、仕事の方はノロイ方で中々はかどりませんでした、自ら手を下して出來得る時間の一倍半位を與へても、中々はかどりません、心算に其のグズを不快に感じました。妹の方は勝氣で野育ちでよく仕事ははか取ります一定の時間の半ば以上で、チャンと奇麗に臺所でも、何處でも、片付けて居ります、若いにしましては中々よく氣がつきます、頭痛がすると思へば、すぐ床を取りて頭を撫でるといふ風で、彼れの受持の仕事はよく短時間に仕上げて餘裕があるのであります、一體に氣短で怒り易く、私共がよく氣分でもわかるくて、口數でも少ないとすぐ不機嫌でもあるかの様に彼は氣持をわるくするので時々手コズル事があります、自然子供には不親切で、氣に向いた時はやさしく子供を取扱ひますが、大抵は七面倒なといはぬばかりな言葉使で、無邪氣な子供の仕打ちでもよく本氣に怒つたりなどして

私の目の届く中は余りキビくしい事は遠慮して居る様で御座いますが、それでも今少し子供にやさしくして呉れないと子供がなづかないよと私から小言を言はずに居られない事がよくあります。姉の方でありますと、時々止を得ない事の起りました時、外出いたしますのに子供を預けても、余り心配はいたしませんでしたが、今度目は少しも安心して、預けて居る気がいたしません、一寸外出しますにも、ゴロゴロ皆連れ出しまして、連れ出されない場合には、時々義理を缺いでも出ない事があります。

ドチラにいたしましたしても、一家に雇入れて家族の一員といたします以上子供を隔離いたさせる事は出来ません、マ一子供嫌ならば成丈近寄せない注意をするといふまで、彼等の悪感化を受けさせないといふ事は、上流の家庭を除くの外出来ない事であり、無論出来得る限り母の手で、育てる覚悟であり、時には止を得ぬ事の爲めに日に幾回も下婢の手に委ねられる場合もあるのであります。いづれも一利一害でありまして、

ドーモ無教育な人間には、有勝な仕方のない事であり、若し雇入れて仕舞ひましたならば、其の長所を賞すると同時に、其の短所を知らしめて、之を矯正させる様につとめなければなりません、先づ目見得の中であつて、子供の少ない中ならば余り下婢の手に委ねる必要もありません、勝気なものでも宜しいで御座いませうが、子供の多い中とか、或は亦主婦が留守勝で、子供をより多く下婢に接近せしめるといふ様な家庭でありますならば、少々ノロマでも何でも他の事は我慢して、眞に子供を愛するといふ様な、温順な下婢を雇入れた方が、宜しいかと存じます。

